

に其の父の爲に広く功徳を修る。因果の理めに信はざらむや。

幼き時より網を用魚を捕りて現に悪しき報を得る

第十二章

佛曆國旃羅郡の邊於等に、京の元興寺の沙門慧心大德、檀越の請に因りて夏安居の間法花經を講く。時に寺の辺に漁夫有り。幼きときより長るまで網を以ちて業とす。後の時に家の内の桑林の中に鉋鉋ひ、市を擲けて呼号ひて曰はく「炎火身に迫る」といふ。親風教はむとすれば、其の人唱ひて言はく「我れに近くことなかれ。我れ頭に焼かれむ」といふ。時に其の親等に詣てて、行者を講求ひ。行者覓する時に、良久にありてすなはち免る。其の著たる榜牒かれりて、漁夫憚り、還於寺に詣てて本衆の中にして罪を懺い心を改め、衣服等を施し、經を誦ましめ覺りぬ。此れより以後、また惡を行はず。顧氏家訓に云ふが如し「昔江陵の劉氏、緇の黨を亮ることを以ちて業とす。後に一の兒を生み、頭は長れ髪にして頸より以下は方人の身と爲る」といふは、其れ所を誦ふなり。

[illegible]

人と畜とに履まるる體救められて靈しき表を示

して現に報ゆる 縁 第十二

高麗の學生道登は、元興寺の沙門なり。山背の惠満の家より出づ。而住大化二年丙午に宇治橋を営りて往き來りし時に、隱饒祭良山の溪に在りて、人と畜とに履まる。法師悲びて從者万侶をして木の上に置かしむ。同じき年の十一月の晦の夕に返りて、人寺の門に來りて白さく「道登大總の從者万侶といふ者に遇はむ」とまうす。万侶出でて遇ふ。其の人語りて曰はく「大總の意の願を蒙りて、平安なる慶を得たり。然うして今夜にあらずは恩を報いむに由無し」といふ。すなはち万侶を得て其の家に至り、閉ぢたる屋よりして屋の裏に入る。多く飲食を設く。其の中に己が分の饌を以ちて万侶と共に食ふ。其の後夜にして男の声有りて万侶に告げて曰はく「吾れを殺せし兄來らむ。故に早く去れ」といふ。万侶怪びて問ふ。答へていはく「昔吾れ兄と共に交馬に行き、吾れ銀四十斤ばかりを得たり。時に兄妬忌みて吾れを殺して額を取りき。爾れより以還、多く年歲を経て、往き來る人と畜とみな我が頭を

[illegible]